自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2012 年６月

No. 59

～１冊の本が人生を変える～

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association(TAAA)

２０１２年６月までの報告と予定

■	1月	本12798冊、サッカーボール751個、算数セット52個などウグ郡に到着
■	1月～5月	南アにて図書・学校菜園・サッカーボール支援活動など
■	1月～5月	国内で月に一度、本などの梱包作業
■	3月～5月	南アで教師と生徒が有機農園で研修
■	2月～5月	インターナショナルスクールなどから英語の本引取り
■	5月	南アを訪問
■	7月	TAAA 活動報告会

目次

■ 南ア活動報告/学校菜園・サッカー・学校の図書支援（平林薫）・・・・・・・・・・・・・・2
■ 南アのウグ郡訪問（久我祐子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
■ 佐々木智恵さんからの手紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
■ 福島ボランティア2回目（石黒秀多）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
■ 埼玉大学グループ Re さいくりんぐ・いわき市に献花（榊裕美）・・・・・・・・・・・・・・9
■ ５月１３日（日）の作業報告（西村裕子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
■ ２０１１年度決算書・・・10
■ 主な活動・・・11
■ 寄付をして下さった方々・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

学校菜園で小豆の収穫　　ムチェレニ小学校

南アフリカ活動報告
～学校菜園・サッカー・学校図書の支援～

TAAA 南ア事務所　　平林　薫

↑バボンギーレ小のピットベッド（有機農業の堆肥の穴）

南アの暴力的状況と子供たちへの種まき

メディアでは連日、小さな市町村に至るまで人々がデモ行進をする姿を映し出しています。政治的なもの、権利を訴えるもの、政府や自治体の怠慢や不公平に対するものなど対象はそれぞれですが、人々のふつふつとした“怒り”が感じられます。一触即発の事態になりかねないことが懸念されます。

ネガティブな報道が多い中で、民放のETVが製作している“Against All Odds”という番組は、様々な困難に直面しながらも前向きに生きている人々や彼らの活動を紹介するもので、私たちに希望を与えてくれます。若いンゴベニさんという男性のストーリー。幼いころ母親に置き去りにされてジョハネスバーグのストリートで生活し始め、犯罪に関わり捕まって刑務所へ。この状況からは抜け出せない中で、このンゴベニさんは刑務所内で自分のアート（絵画）に対する情熱と才能を見出し、出所後、小さなアパートで制作を続け、今ではギャラリーで展覧会を開くまでになっています。“誰でも自分の力を発揮できる時が必ず来る。これだ、というチャンスを捉えたら、あとは迷わず突き進むんだ”という彼の瞳は輝いていて、自信に満ち溢れていました。

私たちはプロジェクトを通して彼ら自身の興味や才能を自他共に認め、伸ばしていってあげたいと思っています。将来、ヒバディーン地域の子供たちの中からファーマーからサッカー選手、デザイナーからミュージシャン、大学教授から宇宙飛行士まで、すごいプロが生まれるかもしれません。私たちは今、ちょうどその種を撒いているところなのだと思います。

→エチェレニ小の巨大カボチャ

JICA 学校菜園活動

３年目のモニタリング

JICA草の根技術協力事業によりウグ郡の３地域で行っている“学校を拠点とした地域農業促進プロジェクト”は、いよいよ３年目に入りました。２月上旬には３地域の中心となる学校を会場として教師を対象とした研修会を開催し、これまで指導してきたことがそれぞれの畑でどのように活用されているかの報告や、問題点・疑問点を挙げてもらい、他校の教師からの意見や専門家からのアドバイスを行いました。また、新たに導入した“モニタリングチェックリスト”を使って、会場となった学校の畑の状況確認を行いましたが、モニタリングはあくまでも活動の現状の把握と改善を目的としており、担当教師を責めたり、強制したりするものではないことを伝えました。それぞれの教師や学校のペースをできるだけ尊重し、良好な関係を保ちながら活動を続けて行くことが大切だと考えています。暑い夏の長期休暇明けということで各校では雑草取りに忙しく、メイズ（トーモロコシ）

↓リチャードさんの有機の農園で研修を受ける生徒たち

↓エンプレメロ小の菜園　奥は苗床　右は久我と野田

やカボチャ類の夏の作物収穫後に次のシーズンの植え付けの準備を始めました。

有機野菜と伝統食作り

プロジェクトでは有機野菜作りの知識や様々な方法を指導していますが、自分たちの手で育てた新鮮な野菜を、栄養価を逃さずにおいしくいただくための調理法や、バランスの良い食事の指導も重点に置いています。特に伝統食の栄養価を見直し、忘れられつつある伝統野菜についての偏見を取り除き、知識を次の世代に伝えて行くことの大切さも訴えています。教室内に“栄養テーブル”を設置し、収穫物はもちろん、添加物の入った調味料の箱を陳列したり、栄養素表や食に関するポスターを貼ったりして、生徒たちへの栄養指導を進めるようアドバイスしています。

有機の農場での研修が生徒のリーダーを育てる

3月末にヒバディーン地域小学校2校の菜園クラブの生徒15名が、農業専門家リチャード・ヘイグ氏のエナレニ農場を視察訪問しました。生徒たちは伝統牛や羊の飼育を見たり、様々な種類のニワトリに驚いたり、たくさんの種類の野菜があることを学んだりしました。中でも“ケーキ、パイやジュースだけでなく、コーヒーやマヨネーズ、アイスクリームも手作りできる”ことに驚き、学校に帰って他の生徒たちに興奮して話していたようです。このプログラムは当初高校生を対象に始めましたが、小学校高学年で菜園活動を積極的に行っている生徒が農場を訪問して直接指導を受け、様々な体験をすることは大変効果的であると認識しました。校内ではそれらの生徒がリーダーとなり、他の生徒に教えたり、巻き込んだりする形で菜園活動が進められています。

5 月上旬には教師対象研修会をエナレニ農場で開催しました。各校の担当教師はヘイグ氏の有機農業研修を受ける中で、彼の農業に対する姿勢や熱意に引き込まれ、彼の農場を視察見学して研修を受けたいという声が上がりました。ロバで畑を耕し、リサイクルや様々な工夫をしながら有機農業を行い、食材はほとんど自給で食事は手作り、伝統のングニ牛の飼育やランの栽培など、教師も菜園クラブの生徒と同じくらい興奮して、楽しみながらたくさんのことを学んでいました。今後、活動終了までに“農業展示会(Royal Show)”や他の農場への訪問など、教師や生徒が農業に関して知識や視野を広げられるような体験を計画しています。

水不足とたたかいながら収益上げる学校

ドゥドゥドゥ地域は他の2地域よりも降雨量が少なく、また自治体の水道の設置も遅れていることから、活動の継続が難しい学校も出てきました。しかし、地域内でも近くに川があるか、雨水をしっかり溜めて無駄なく利用するなどで活動が順調に進んでいる学校もあります。特にムチェレニ小は休暇中も毎日畑の世話をするスタッフを配置していることから、年間を通して多様な種類の作物の収穫があり、昨年末から今年の初めにかけて、夏の作物の余剰分を販売して約 R3000（約￥35000）の収入がありました。かぼちゃコンテストも間違いなくムチェレニ小が優勝でしょう。同じくドゥドゥドゥ地域のバボンギーレ小では、担当教師が病欠している間、生徒は自分たちで苗の移植と毎日の畑の世話をしっかりと行い、教師が復帰したときには畑が拡張されていて驚いたといいます。

エシウォニ小では豆の収穫→

研修会で各校の担当教師に“学校での菜園活動で問題となっている点”をあげてもらったところ、“気候変動”という声が多かったことに驚きました。研修会後に農業専門家と話し合い、昨年の国際会議などの影響もあって人々の環境への意識が高まっていること、また実際に雨の降り方や降る時期が変わってきているのだということを認識しました。また、野生動物が里に出てきて作物を荒らすという問題も、自然と人間の生活との間にあつれきが生じていることを思い知らされます。

ヒバディーン地域のムシカジ・コミュニティーグループおよびムタルメ小の保護者グループは栽培と収穫が継続され、安定した活動を行っています。特にムシカジグループは積極的に販売を行っており、前期はバターナッツの販売が好調でした。グループは輸送手段を持っていないのですが、グループリーダーが各方面にコンタクトをとり、私たちの訪問時にも業者が軽トラックで次の収穫の買い付けの話し合いに来ていました。今期はキャベツとジャガイモ、ダイコンも育てており、収穫が楽しみです。プンガシェグループの共同の畑では、イノシシの被害がひどくなってきており、収穫を荒らされてしまったことから、メンバーは現在家庭菜園に切り替えて個別に活動を行っています。

保護者から家庭菜園へ

菜園活動がコミュニティーに広がり、浸透するためには、まず学校での活動が順調に行われ、コミュニティーメンバーである保護者がその重要性を理解し、興味を持って自分たちも活動したいと思うところから始まるのだということを改めて実感しています。プンガシェ地域のシャルワネ小では保護者を対象とした研修会を開催して実地講習を行い、種を配布し、それぞれの家庭で菜園作りが始まりました。

インプレメロ小の菜園で働く生徒たち→

↑日本で空気を抜いて送り南アに着いたら、空気をいれます。

↑元気いっぱいのエカニェニ小の生徒たち

サッカー交流・支援活動

1月末に日本からサッカーボールが届き、TAAA現地スタッフ2名と共に現在活動を行っている31校に平均12個ずつ（生徒数の多い学校には15-18個）寄贈しました。発送時に空気を抜く作業も大変だったと思いますが、また空気を入れる作業も結構時間がかかりました。訪問日を事前に学校に連絡し、休み時間や放課後を利用して現地スタッフが指導したり、ミニ試合を行ったりしました。サッカーチームのある学校にはチームメンバーにボールを渡しましたが、“ボールの寄贈でいつでも練習ができるようになった”と喜んでいました。プロジェクトでは基本的に高学年の生徒への指導を中心に行いましたが、グレードR（幼稚園生）や1-2年生の低学年でも大変な興味と潜在能力を見せる生徒もいました。

南アはワールドカップを開催した国であるにもかかわらず、遠隔地域の学校ではいまだに生徒が利用するためのボールやユニホームを十分に揃えることができず、企業やNGOなどからの寄付に頼っている状況です。運動場はひどい状態で、ゴールポストに岩やバケツを使っています。体育館や鉄棒、跳び箱などの運動器具は夢のようです。今年度より体育が授業課目に組み込まれましたが、体育教員がいないこと、教師自身が体育の授業を受けて来なかったことから、どのように指導していいのか分からず混乱も見られます。

サッカーボールを見た時に、幼稚園生から高校生まで例外なく生徒の目の色が変わり、教師も躍り上がって喜ぶ姿を見て、学校にとってサッカーボールはどんなに貴重なものかということを確認しました。ボールの寄贈後、学校訪問をすると休み時間や放課後に一目散に校庭に走って出てきて練習をする生徒たちを見かけるようになっています。

子供たちの健やかな成長にスポーツが重要な役割を果たすことは十分に理解されてはいますが、現地の学校では資金面やマンパワーなど様々な問題を抱えており、今後も物資等のハード面と技術指導等のソフト面、両面からの継続した支援が必要であることを改めて感じています。

ワイルダー小にて

学校図書支援活動

理数の本やズールー語の本も大歓迎

ひろしま祈りの石国際教育交流財団からの助成金で昨年4月より始まったプロジェクトは、ウグ郡内の2地域（ドゥドゥドゥ・ヒバディーン）の20校を対象として、移動図書館車の巡回訪問を中心に本や本棚の寄贈、研修会の開催等を行いました。

1月末に日本からの船積みの通関が完了し、TAAA事務所内に配送され、本の仕分けなどの準備をした後各校への寄贈を開始しました。本は高校生以上のレベルが多いことから、移動図書館車で利用するもの、活動対象校に寄贈するものを確保した後、州教育省を通して地域内の高校に呼びかけたところ、3校が軽トラックで本を引き取りに来てくれました。“日本から寄贈された本はすぐに授業に活用できるものが多く、とても役立っている”とのコメントをもらっています。地域の学校では生徒たちが母語であるズールー語と共通語の英語を学んでいますが、ズールー語の本が圧倒的に不足しています。プロジェクトでは、ズールー語の本を購入して移動図書館車に搭載し、各校へ貸出しをすることとしました。

移動図書館車の巡回訪問は基本的に1学期に各校2回ずつ、貸し出しと返却という形で行っています。学期を挟んで休暇中に本を読みたい生徒には、担当教師が責任を持つ形で2回目の訪問時にも貸出しを行います。また、生徒数の多い学校では、1回の訪問に1学年しか対応できない場合があり、2回目の訪問で他学年に貸出しをするなどしてできるだけ多くの生徒が利用できるようにしています。各校では生徒たちがバスの到着を楽しみにしており、まだ自分たちで借りることができない低学年の生徒も集まってきて興味深そうに眺めています。生徒から“また明日も来てね”と言われると、学校に図書室が設置されて生徒たちが本にアクセスできるようになるまではがんばらなければ、と役割の大きさを実感します。

2月－3月の間、移動図書館車がブレーキや燃料タンクなど3回も故障して修理に出さなければならず、予定の変更を余儀なくされてしまいました。対象地域は道路のコンディションがとても悪く、メンテナンスにかなりの費用がかかります。3月6日には1年間の活動の締めくくりとして、ヒバディーン地域のインプメレロ小学校を会場に各校の図書担当教師を対象とした研修会を開催しました。研修会では改めて学校図書室の重要性や活動の進め方、図書の基本的な分類などを指導し、教師から大変喜ばれました。図書担当と言っても多くの教師は図書館についての経験や情報に乏しいため、学校での活動に必要な基礎的知識を指導した今回の研修会は効果的で、また1年間のプロジェクトの総括と今後の活動計画についても話し合うことができました。

棚があっても本が足りない学校→

図書クラブの設立と本棚の大切さ

昨年4月から活動を始め、各校では担当教師が活動の進め方を少しずつ理解してきたことや、蔵書も増えてきていることで、すでに各校では図書クラブ設立や読書の時間を設けるなど、図書活動の定着が見られるようになってきました。各校の図書担当教師の役割は大きく、継続的に適切なアドバイスやモチベーションを与えてあげることが必要だと思います。生徒たちが本に親しみ、本を活用できる環境を作るために、今後も物資等のハード面と知識等ソフト面との両面からの支援を続けて行きたいと考えています。

今期は校内に設備の乏しい 15 校に本棚の寄贈も行いました。地域の学校は公立校といっても設備やリソースの状況はまちまちで、例えば校長が企業などから寄付をもらって本棚を設置できた学校もあれば、全くリソースがない学校もあり、不公平感が否めません。せっかく蔵書があっても本棚がないため本が山積みになっていたり、箱の中にしまわれたままになっています。本を整理して本棚に納め、教師や生徒が利用できる状態にしなければなりませんが、地域の学校では本棚1台購入することもままならない状況が続いており、本棚の寄贈は大変喜ばれました。

地元の本棚制作所の存在

本棚は地元の小さい工場で一点一点心をこめて製造されたもので、工場長のバーナードさんから“地元の学校への支援と、私たちにもこのような機会をもらえて感謝している”とのメッセージがありました。一昨年に寄贈した本棚もこの工場で製造されたもので、各校で有効に利用されています。彼は以前ダーバンで仕事をしていましたが、故郷の村を発展させたいとの願いから実家に戻り、2003 年に家具製造のビジネスを立ち上げました。若い人たちに技術を身に着けさせることが大切だと言い、“自分がやりたいと思うこと”“得意な分野”を認識することから始まり、最終的にはそれぞれがプロとしてつながり、協力し合うことで、コミュニティーの人たちが仕事を持ち、自立していかれるはずだと訴えます。“私はこのような田舎の村でもビジネスを興して自立できるという例を示したい”と話し、また若い人たちに“まじめに仕事をするということ、職業倫理を伝えたい”とも話します。

↑古い教会を使って木工制作所を営むバーナードさん

”移動図書館車“のリクエストとコンテナ―図書室計画

4月からはボランティア貯金の助成金による学校図書支援活動が開始となり、プンガシェ地域も含めた3地域の30校を対象に活動を行っています。プロジェクトでは図書室用のスペースのない学校に改装したコンテナーを寄贈し（8校）、本棚を設置して図書室として利用する計画をしており、現在準備を進めています。また30校全校に図書室用の本棚の設置、もしくは図書室で必要な備品の購入、予算内で学校が必要としている本を選び、購入・配布するプログラムも進めています。

TAAA 南ア事務所はヒバディーン地域をベースとしていることから、距離やアクセスの点からも特に地域内の学校とのつながりが深まってきています。“きぼう号”は地域内で知られるようになってきており、聞いたことのない学校からいきなり“何でうちの学校を通り過ぎて行ってしまうの？うちの学校にも来て！”と連絡が入ったりするようになりました。4 月の新学期以降、近くの学校がプロジェクトに参加して活動をしているのを見て新たに3校から活動への参加依頼が入りました。学校数が増えることで十分に指導、対応できるかを考慮しながら、できる限りのサポートをしたいと思っています。

巡回訪問に向かう途中、近くの学校を通り過ぎる時に生徒がバスに向かって手を振っているのを見たりすると、“この学校にも訪問しなくちゃ”と思います。しかし、ヒバディーン周辺だけでも60校以上、ウグ郡内には557校もあるので、あせらず、現在の対象校としっかりと活動を行うことが優先だと考えています。大きな目標は郡内すべての学校に菜園と図書室の設置。もちろんそれは学校や州教育省の目標でもあるので、協力しながら一歩ずつ前進していかれればと思っています。

←各校の図書担当教師の研修会を行う。

～南アのウグ郡訪問　～

TAAA 代表　　久我 祐子

インプレメロ小にて

5 月３日～6 日に野田千香子事務局長と現地の学校を中心に視察訪問をした。

★学校が極貧家庭の子供を支える

初日、支援対象地域であるムタルマ地区の教育センター長のフォロンガネさんに青少年がかかえる問題をお聞きした。ほとんどの子は、祖母に育てられている。親のいない子供が多く、一人の祖母が年金で複数の孫を育てているケースが一般的。子供だけで暮らしている極貧家族の過酷な状況や、祖母がいても高齢や病気で、子供たちが放任状態になっている悲惨な状況などが語られた。食事を摂れず、一日の食事が給食の子供たちも多く、病気の時も「学校に行けば先生が病院に連れて行ってくれるから」と登校する子供も多いとのこと。学校が、食事や病気のケアなど「生き延びるため」に基本的なものを提供する場にもなっている。それだけ現場の先生達は大変だ。

ウグ郡は、広大なサトウキビ畑が奥地まで延々と続く地域。サトウキビ畑に挟まれるようにしてある小丘や谷に、ぽつんぽつんと民家が点在し、密集した集落はない。一見のどかにみえる遠隔地域だが、ドラッグ、犯罪、レイプ、HIV に関連する都市部で顕著な問題が浸透してきている。想像していた以上に問題が深刻化し奥地まで拡大化していることが分かった。「貧困からくる悪循環」というフォロンガネさんからの話で、都市部との比較で「自分たちは取り残された」という意識をもちながら、生きる希望を失い自暴自棄になっていく遠隔地の若者の姿が見えてきた。

★有機農業が根付くインプレメロ小

次の日は学校訪問をした。学校菜園プロジェクトで教師研修会場として使われるインプレメロ小学校（シニアプライマリー）を訪ねると、授業中に数人の生徒が菜園で作業をしていた。「テクノロジーの時間に、実践として菜園を使っています」といいながら担当のンソミ先生が菜園を案内してくれた。昨夏の訪問時でも、菜園が様々な授業に応用されていたが、今回の視察では、活動が 3 年目に入ったこともあり、授業への応用が「定着」していることを分かった。自然科学、生活科、テクノロジー、農業（高校）、美術（スケッチとして）など。そして体育にも活用している学校があった。それだけ一般的に教材や教具が不足しているが、先生たちの応用力で菜園が様々な教材になっている。インプレメロ小学校は、忠実にパーマカルチャーを実践しており、菜園にはピットペッドがあった。熱心なンソミ先生は、週末も時々畑の世話に学校にくるそうだ。生徒用にランチを持参し、生徒達にも来させて世話をさせているといっていた。収穫物がいくつか展示され、理科などの教材に使われていた。

★「俺たちの畑」で積極的に働くワイルダー小の生徒

さらに奥地にあるワイルダー小学校。幼稚園から小３までの生徒が通っている。校長先生とのミーティングで、厳しい貧困環境にあることが分かった。2 時間かけて通学する子も多く、校長先生は、毎朝、幼い子供たちを車で送り迎えしてあげている。子供たちは、私たちに興味津々。手をふったり、握手してきたり、と人なつっこくて可愛い。南アの遠隔地の小学生たちを取り巻く過酷な環境と、かれらの元気いっぱいの姿には、大きなギャップを感じ驚かされる。学校は彼らにとって生きる喜びやエネルギーの源になっているのだ。

放課後、数人の男の子たちが、「俺たちの畑」とばかりに、威勢よく耕しはじめた。慣れた手つきだ。家の周辺にメイズを育てている家庭の子供も多く、子供どうしスキルを教え合い学び合っているそうだ。菜園での生徒どうしの学び合いは、他の学校でも顕著に見られてきた傾向だ。担当教師も生徒から学ぶことが多いそうだ。ここはスペースがなく、小さい菜園で、収穫物はすべて給食に使われている。その後、3 校訪ねたが、以前と比べてより積極的に主体的に菜園活動をするようになったことが分かった。昨年度、農業専門家のリチャード氏の有機農園に生徒達を訪問させたり、学校での教師対象のワークショップに生徒達も参加させた経験が大きかったと思われる。専門家から直接指導を受けた生徒たちは、はりきって他の生徒たちに教えている。教え合い学び合うことは、スキルだけではなく、協調性やリーダーシップを育んでいく。

★学校の持つ役割の大きさ

今回の訪問で、南アの遠隔貧困地域の学校が、子供の成育過程のあらゆる面で、いかに大きな役割を果たしているのかを改めて確認した。リソースの絶望的な欠乏という元々の問題に加えて、犯罪などの都市部的な複雑な問題も顕著になり、子供たちは厳しい環境下におかれている。ＴＡＡＡは、長年学校支援をしてきたが、今一度、彼らのことを「学校の生徒」というよりも、学校に通う「村の子供や若者」という包括的な視点で捉えなおす必要があるのではないだろうか。そして、そのような視点から彼らの成育過程を「学校というキャパシティ」を生かして、今後いかに効果的に関われるか。菜園活動を通した彼らの主体性や積極性を、今後いかに建設的な方向に伸ばすか。大きな課題が与えられた訪問になった。

佐々木智恵さんからの手紙

佐々木さん宅に避難してきた子どもに本を見せている佐々木さん（撮影：茂住衛）

石巻市民で、ご自身も被災者でありながら、震災直後からずっと支援活動をしている佐々木智恵さんからお手紙をいただきました。ご紹介いたします。

アジア・アフリカと共に歩む会の皆様方へ

春のおとずれを感じながら、もうすぐあの大震災から一年一ヶ月がたとうとしています。この一年、「アジア・アフリカと共に歩む会」の皆様方に、多大な御支援を賜りましたことを、友人、知人を代表して厚く御礼を申し上げます。

昨年の地震で、日本中が大変な中、皆様におかれましても、大変な思いをされていた方もいたのでは・・・と思うと、心があつくなりました。皆様から送って頂いた真心の御支援は、私の友人・知人にも協力してもらいながら、たくさんの方々へ声がけをし、津波で被害にあってしまったお子様がいる家庭を中心に、ご高齢でお孫さんがいる家庭、おいっこ、めいっこさんのいる家庭など、100 を超えるご家族のもとへ届けさせて頂きました。石巻が中心でしたが、石巻も数年前に地域合併として広くなってしまいました。市街地が主な届け先でしたが、牡鹿半島の鮎川という半島方面や、女川、また東松島市の大曲方面も甚大な被害をうけ大曲地区も住めない地域となりました。 その方々にも避難されたところ、また、アパート、仮設などに行きました。広くは仙台方面の浸水した地域の方々にも届けさせて頂きました。

牡鹿半島の鮎川という所より、もう少し先に、新山浜という地区があります。ここの地区は、金華山という島に守られ海の津波被害は少なかったのですが、地震の震源地にとても近かった為、山がくずれ山津波が発生し、孤立した地域でした。普段はあまり使う方も少ない山道も、抜け道をさがしながら当時は使っていたそうです。新山浜地区にご家族を持つ方が石巻にいました。道路は危険な所が多いということで、その方々が帰る時などに届けて頂いた事もあります。2 月にだいぶ道が良くなったとの事で行ってみましたが、いまだに危険な道を通って地元の方々は暮らしているのだと改めて思いました。

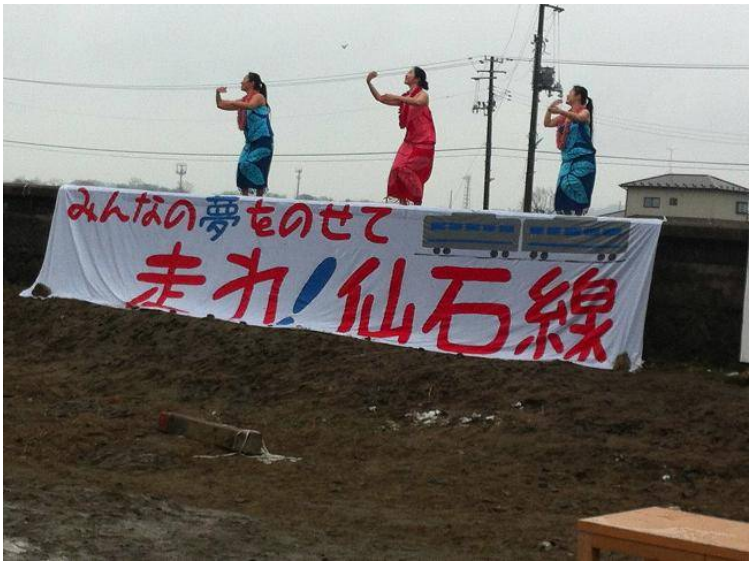
お子さんのいる家庭はだいたいが高台にある仮設で暮らしています。必要な物なども、どこの家庭でもひととおり落ち着きをみます。

しかし、3・11を前後に、心の中にかかえてしまったそれぞれの思いが暗くかげをおとしています。先月、ある中学校の校長先生にお会いする機会があり、お話をうかがいました。震災から一年をむかえ、色々なところから、メディア・マスコミがくるそうです。中学というところは、年代的にも重要で、この震災の中、受験にいどむ生徒さんもいらっしゃいました。メディア・マスコミの方々は、仕事としてとらえてくるので、被害にあった方々の心によりそうのではなく、まるでイベントのような感じでみえたそうです。「子供達は、小さな仮設でまわりに気を使いながら、大人達の会話を聞き暮らしているそうです。子供と大人の間の年齢で、いろいろなものをずっしりとせおって、朝登校してきているんです。その子供達を守る為に取材は断った」と言っておられました。たくさんのお話の中の一部で、皆さんに伝わるかどうかと思いながら書きました。 心の復興が大きな課題です。

私をふくめ地元や地元近くで暮らす人々はまだ、少しでも話す人や心の悩みを理解しあえる人がいますが、福島から避難して暮らしておられる方々を思うと、本当に心が痛みます。同じ原発をかかえている地域の一人として、考えさせられる事や、心のおき場所や、いろいろと思うと、年のせいか涙がとまりません。同じ東北の友として、何か心によりそえる様な事が出来るなら・・と思います。

これからも地元、石巻が中心になるかとは思いますが、支え支えられながら、心の復興を皆さんと共に絆という虹の橋を築き上げていきたいと思います。長文になり、また文書作りがにがてなため、読みづらかったらすみません。長文を読んで頂き、ありがとうございました。季節の変わり目ですので、体調に気をつけてがんばって下さい。

佐々木智恵



2012年3月10日、津波で線路も駅舎も流失したJR仙石線東名駅にて、
JR仙石線の早期全面復興を求めるイベントで行われたフラダンス
（撮影：茂住衛）

ギターを弾きながら、歌う飯塚さん（中央）

福島ボランティア２回目

実施日：２０１２年3月２３日、３月２４日
場所：福島県福島市
メンバー：森直之、横山礼、石黒秀多

東京から５時間くらいで福島市に着いた。平日の昼ということで町を行き交う人はあまり見られなかったが、いたって普通の町として機能していると感じた。スーパーがあり、民家があり、公園がある普通の町。ただ唯一違うところがあるとすれば、各公園に放射線量を計る大きな機械がずっしり立てられているということだった。町を見てみた限り、小さな公園から大きな公園全てに立てられていたと思う。放射線を示す赤い数字が不気味に思えた。前回に引き続きお世話になる飯塚さんのお話によると，その機械が現れて以来公園から子供がいなくなったという。悲しい話だが、本当に放射線が漂っていることを実感した。

両日の午前中は、飯塚啓子さんが代表を務める「アートさをり」（障害者の福祉事業所）にお邪魔した。そして、アートさをりエンジェルズの演奏を聞かせていただいた。尺八やギターといった楽器に合わせて音楽を演奏された。身振り手ふりでメンバーの皆さんが踊られていたのが印象的で、どの曲も素晴らしかったと今にも思う。

また、はた織りの体験もさせていただいた。皆さんが織られるような綺麗なものは作れなかったが、はた織り機を初めて使うことができた。

作業は 23 日と 24 日の午後に行なった。今回の滞在目的は、飯塚さん宅の庭の手入れを行い以前の状態よりも綺麗にするということであった。丸太を切り、まとめる作業。木を根っこから取り出す作業。耕す作業。どれも大変であった。1 日目の天気は雨。東北の 3 月はまだまだ寒かった。慣れない作業を若い力でがむしゃらに続けていった。作業後に頂いた飯塚さんの美味しい料理のおかげで疲れはほとんど出なかった。

活動は第３回目へ続く。今回の作業で、庭に漂っていた 1.40 マイクロシーベルトの放射線量を 0.40 マイクロシーベルトにまで下げることができた。

参加してみて感じたこと

僕は正直なところボランティアには興味がありませんでした。何かして、被災してしまった地域の方をお手伝いしたいという思いはありましたが、自分からボランティア機関(？)を探したり、個人で行こうと思ったことはありませんでした。そんなとき、たまたま近くにいた森君と横山君たちの活動を知り、自分でも何か役に立てそうだと感じた為、一緒に参加させていただくかたちになりました。

作業自体は、天候の影響もあり思うようにいかないこともありましたが、飯塚さんに喜んでいただき、ありがとうまたお願いね。とおっしゃって下さったことが何よりの収穫であったと思います。（石黒秀多）

１回目の除染作業は、昨年、9 月に行いました。知的障害者の息子さんと二人暮らしの飯塚啓子さんは 7 月に朝日新聞に投稿されました。「今朝も朝日に輝くこの庭を、開けてはいけない居間の窓辺にたたずんで眺めている。『立ち入り禁止』の札が風に揺れている。・・」飯塚さんに連絡をとり、どこまで役に立つか分からないけれど、自給自足という夢を担っていた庭の除染のお手伝いができれば、と森さんたちに話したところ、実行してくれることになったのです。

１回目 9 月には汚染されてしまった庭木を下から切り、伸びていた草を刈りました。若干、放射能線量が下がりました。春に向けて、森さんたちは２回目の除染を行ないました。草や木を根っこから掘り出しました。私も半日だけ根っこ洗いを手伝いました。この日は前日に降った雪が解け、庭は泥でぐちゃぐちゃでした。雪解けでも春の日の下で作業をしているとマスクや手袋も取りたくなる暑さでした。飯塚さんに喜んでいただけたけれど、あともう一度、行って表土と深い土とを入れ替えて、もっと線量を下げたいと森さんたちと話し合っています。（野田千香子）

昨年 9 月の除染作業、飯塚さんの庭にて

◆　主な活動（2012 年 1 月 16 日～2012 年 5 月 15 日）　　*下線は南アにおける活動*

1/15 会報５８号発送準備　　高野千恵美
1/15～29 ５８号編集・校正　野田千香子　西村裕子
1/17 ミーティング　　平林薫　久我祐子　　野田
1/20 住所ラベル更新　　西村
1/24 平林薫　南アへ戻る
1/27 JICA スタッフ会議（ヒバディーン）　　平林
1/28 HP に会計報告掲載　　久我
1/29 日本からの貨物搬入（ヒバディーンへ）　平林
1/30～　本の整理開始　　平林（南アスタッフ）
2/1 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
2/2 JICA 教師研修会（プンガシェ）　平林
2/7～　会報 58 号郵送作業　　野田　　高野
2/9　JICA 学校菜園プロジェクト教師研修会（ドゥドゥドゥ）　平林
2/12 作業とミニ講座（講師：森直之　カンボジアのサッカー支援）北爪健一　野田　鯨井幸一　西村　高野　下谷房道　　浅見克則　　茂住衛
2/13 東北被災地へ物資送付　　高野
2/13～16 プンガシェ地域学校訪問　　平林
2 月～　HP 更新数回　　久我祐子
2/17 プンガシェコミュニティグループ訪問　平林
2/20～24 ドゥドゥドゥ地域学校訪問　　平林
2/21 クリスチャンアカデミーインターナショナルスクールへ本引取り　　浅見　久我
2/23 JICA 会議　　久我
2/27～3/1 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
2/29 セントメリーインターナショナルスクールへ本引取り　　浅見
3/2 図書プロジェクトスタッフ会議（ヒバディーン）平林
3/6 JICA 業務変更契約書締結　　久我
3/6 図書プロジェクト教師研修会　　平林
3/8 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/9 移動図書館車修理へ　　平林
3/13 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/14 ボランティア貯金へ実施計画書提出　　久我
3/15 プンガシェ・ンシャルワネ小・保護者対象菜園研修会　　平林
3/17 南ア各地の移動図書館車プロジェクトの報告を提出依頼　　久我
3/19 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/20 ヒバディーンの小学校 2 校の菜園クラブメンバーが有機農場研修訪問　　平林
3/23 ヒバディーンコミュニティグループ訪問　平林
3/27 プンガシェ教育センター長と会議　　平林
3 月最終週～4 月初旬　報告書作成・会計作業等　平林
4/1 ラジオ FM よこはま「Yokohama Social Cafe」収録　久我
4/3 プロジェクト車両点検へ　　平林
4/8 TAAA 幹事会
4/8 作業と会議　　北爪　浅見　久我　西村　丸岡　野田　　川口涼子
4/9 国際交流協会にて面談　　野田
4/10 ～13 第 2 学期活動準備　　平林
4/14～　彩の国国際協力基金報告書精算書　　野田
4/16 ヒバディーン学校訪問　　平林
4/17 JICA スタッフ会議　　平林
4/18 JICA へ第 4 四半期報告精算等の書類提出　久我
4/18～20 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
4/21 クリチャンアカデミーインジャパンインターナショナルスクールへ本引取り　北爪　久我
4/23 ヒバディーン地域学校訪問・移動図書館車修理へ　平林
4/24～26 ドゥドゥドゥ地域学校訪問　　平林
4/ 26　JICA にて会議　　久我　　野田
4/27　埼玉県彩の国国際協力基金報告書提出　野田
4/27 南ア大使館フリーダム祝賀会　　久我
4/29 THAN 球プロジェクトと会議　　森　　石黒秀多　久我　　野田
5/1～　会計入力　　高野
5/2 エナレニ有機農場にて JICA 教師研修会　（ヒバディーン地域対象）　　平林
5/2～７　南ア視察　　久我　　野田
5/3 タートン教育センター訪問　　久我　平林　野田
5/4 ヒバディーン学校訪問　　久我　　平林　　野田
5/4 木工制作所バーナードさんを訪問　　久我　平林　　野田
5/5 南ア TAAA にて会議　　中地明子　平林　久我　野田
5/5 イングクコ小校長他と会議　　平林　久我　野田
5/8 エナレニ有機農場にて JICA 教師研修会（ドゥドゥドゥ・プンガシェ地域対象）　　平林
5/9 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
5/10 ドゥドゥドゥ地域学校訪問　　平林
5/11 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
5/13 作業とミニ講座（講師：榊裕美　茂住　被災地支援）浅見　野田　森　鯨井　西村　下谷　津山直子　久我　　榊　　茂住　　渡辺英通　浦和学院高校より　飯島沙耶香　　内藤桃子　森由里奈　吉村彩
5/14 「ぐりとぐら」ラベル印刷　　西村
5/15 図書プロジェクトスタッフ会議　　平林
5/15 平成 23 年度ひろしま助成事業清算書作成　久我

2011 年度(平成 23 年度)TAAA 決算書

Ⅰ:一般会計

（収入の部）

寄付金			692,877
会費		１．会費	118,000
		２．賛助会費	25,000
物品販売収益			51,100
助成金	１．	国際協力機構	9,452,778
	２．	ひろしま祈りの石	500,000
	３．	財・埼玉県国際交流	395,000
	４．	ゆう貯財団	50,000
受取利息			442
		計	11,285,197

（支出の部）

国内図書関係費	349,952
南ア事務所活動費	10,515,395
南ア視察費	944,160
通信費	161,060
事務費	85,375
旅費交通費	52,786
印刷費	60,000
水道光熱費	9,033
雑費	123,742
ボランティア貯金返還金	445105
計	12,746,608

（南ア事務所活動費内訳）

	入金	出金	残高
前期残高			721,444
今期活動費送金	10,373,615		
南ア現地収入			
１．国際協力機構		6,408,383	
２．ひろしま祈りの石		2,226,629	
３．南アTAAA活動諸費		1,292,341	
今期残高			1,167,706

Ⅱ:収支決算書

	前期繰越金	5,475,599
＋	一般会計収入	11,285,197
－	一般会計支出	12,746,608
	次期繰越金	4,014,188
		0

2012 年 5 月 15 日

会　計　:髙野千恵美

会計監査:北 爪 健 一

◆　主な活動（2012 年 1 月 16 日～2012 年 5 月 15 日）　　*下線は南アにおける活動*

1/15 会報５８号発送準備　　高野千恵美
1/15～29 ５８号編集・校正　野田千香子　西村裕子
1/17 ミーティング　　平林薫　久我祐子　　野田
1/20 住所ラベル更新　　西村
1/24 平林薫　南アへ戻る
1/27 JICA スタッフ会議（ヒバディーン）　　平林
1/28 HP に会計報告掲載　　久我
1/29 日本からの貨物搬入（ヒバディーンへ）　平林
1/30～　本の整理開始　　平林（南アスタッフ）
2/1 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
2/2 JICA 教師研修会（プンガシェ）　平林
2/7～　会報 58 号郵送作業　　野田　　高野
2/9　JICA 学校菜園プロジェクト教師研修会（ドゥドゥドゥ）　平林
2/12 作業とミニ講座（講師：森直之　カンボジアのサッカー支援）北爪健一　野田　鯨井幸一　西村　高野　下谷房道　　浅見克則　　茂住衛
2/13 東北被災地へ物資送付　　高野
2/13～16 プンガシェ地域学校訪問　　平林
2 月～　HP 更新数回　　久我祐子
2/17 プンガシェコミュニティグループ訪問　平林
2/20～24 ドゥドゥドゥ地域学校訪問　　平林
2/21 クリスチャンアカデミーインターナショナルスクールへ本引取り　　浅見　久我
2/23 JICA 会議　　久我
2/27～3/1 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
2/29 セントメリーインターナショナルスクールへ本引取り　　浅見
3/2 図書プロジェクトスタッフ会議（ヒバディーン）平林
3/6 JICA 業務変更契約書締結　　久我
3/6 図書プロジェクト教師研修会　　平林
3/8 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/9 移動図書館車修理へ　　平林
3/13 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/14 ボランティア貯金へ実施計画書提出　　久我
3/15 プンガシェ・ンシャルワネ小・保護者対象菜園研修会　　平林
3/17 南ア各地の移動図書館車プロジェクトの報告を提出依頼　　久我
3/19 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/20 ヒバディーンの小学校 2 校の菜園クラブメンバーが有機農場研修訪問　　平林
3/23 ヒバディーンコミュニティグループ訪問　平林
3/27 プンガシェ教育センター長と会議　　平林
3 月最終週～4 月初旬　報告書作成・会計作業等　平林
4/1 ラジオ FM よこはま「Yokohama Social Cafe」収録　久我
4/3 プロジェクト車両点検へ　　平林
4/8 TAAA 幹事会
4/8 作業と会議　　北爪　浅見　久我　西村　丸岡　野田　　川口涼子
4/9 国際交流協会にて面談　　野田
4/10 ～13 第 2 学期活動準備　　平林
4/14～　彩の国国際協力基金報告書精算書　　野田
4/16 ヒバディーン学校訪問　　平林
4/17 JICA スタッフ会議　　平林
4/18 JICA へ第 4 四半期報告精算等の書類提出　久我
4/18～20 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
4/21 クリチャンアカデミーインジャパンインターナショナルスクールへ本引取り　北爪　久我
4/23 ヒバディーン地域学校訪問・移動図書館車修理へ　平林
4/24～26 ドゥドゥドゥ地域学校訪問　　平林
4/ 26　JICA にて会議　　久我　　野田
4/27　埼玉県彩の国国際協力基金報告書提出　野田
4/27 南ア大使館フリーダム祝賀会　　久我
4/29 THAN 球プロジェクトと会議　　森　　石黒秀多　久我　　野田
5/1～　会計入力　　高野
5/2 エナレニ有機農場にて JICA 教師研修会　（ヒバディーン地域対象）　　平林
5/2～７　南ア視察　　久我　　野田
5/3 タートン教育センター訪問　　久我　平林　野田
5/4 ヒバディーン学校訪問　　久我　　平林　　野田
5/4 木工制作所バーナードさんを訪問　　久我　平林　　野田
5/5 南ア TAAA にて会議　　中地明子　平林　久我　野田
5/5 イングクコ小校長他と会議　　平林　久我　野田
5/8 エナレニ有機農場にて JICA 教師研修会（ドゥドゥドゥ・プンガシェ地域対象）　　平林
5/9 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
5/10 ドゥドゥドゥ地域学校訪問　　平林
5/11 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
5/13 作業とミニ講座（講師：榊裕美　茂住　被災地支援）浅見　野田　森　鯨井　西村　下谷　津山直子　久我　　榊　　茂住　　渡辺英通　浦和学院高校より　飯島沙耶香　　内藤桃子　森由里奈　吉村彩
5/14 「ぐりとぐら」ラベル印刷　　西村
5/15 図書プロジェクトスタッフ会議　　平林
5/15 平成 23 年度ひろしま助成事業清算書作成　久我